
プロトクラスト第1章

- レサイヤ -

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロトクラスト第1章

【Nコード】

N4256V

【作者名】

レサイヤ

【あらすじ】

とある世界では、魔術・精霊・魔物が存在していた。

その世界の王国名を《メルティス》その王にかえている兵士名を『ルネ・アルボス（21）』はメルティスの兵士になって5年たっていた。

1年前メルティスの大規模会社に勤めている『エリーヌ・アルボス（21）』と結婚し、新婚生活を送っていた…

メルティスではここ数年の間、国王『ニークル・フェリス国王（30）』の指示で孤児の子らを集め暗殺部隊を作っているという噂が

プロトクラスト

あった。しかし、兵士であるルネはもちろんのこと、上司である『ロツサ・ファルフ（35）』も知らない情報だった。だがある日、顔を悪くしたロツサがルネと数十人の兵士を呼んだ。そこには親友である『ジュン・コルス（21）』も居た。彼等は口ツサについて歩いて行ったその先いたのは…

表記↓ルネ「」

↓出会いの時↓

1話

俺《ルネ・アルボス（21）》はこの国の部隊の兵士になったことを後悔した…

上司である《ロッサ・ファルフ（35）》について来いと言われついていったその先には想像つかない光景があったからだ。

俺が後悔する数時間くらい前の事だ…

ルネ「はよーっす」

いつもと同じ時間に俺が所属する部隊に行くと

ジュン「おはよーさん！なんや今日はやる気はいつとんな」

ルネ「そおか？」

ジュン「お前気いついてないか！？顔がいつもよりやる気はいつてんで」

ルネ「うつせー黙つとけ！！」

さっきから話しているのは《ジュン・コルス（21）》とりあえず同じ年でこの部隊に配属されたのも一緒の悪友みたいなもんだ。

ルネ「そーいえば隊長は？」

ジュン「隊長ならさっき国王に呼ばれてったで。」

ルネ「国王に??」

俺たちが隊長とよんでいる《ロッサ・ファルフ（35）》はこの部隊の隊長で、俺はもちろんのこと、ジュンやほかの兵士も信頼を寄せている人だ。

そして国王の《ニケール・フェリス国王（30）》はここメルティスの国王だ。

国王はあまり俺達兵士には興味がないようで俺らみたいな奴等は話

したこともない。

まーそれが普通なのかもしれないがな。

ジュン「なんか急いでるって感じやったなーなんかあったんか？」
ルネ「急ぎ？まだ両国とかとはなのも問題は起こしてないだろ？」
ジュン「まーそやな！気にせんと待つときゃーええわ。」

そう俺等が話してると

ロツサ「今戻った。」

ルネ・ジュン「「ロツサ隊長」」

さきほど話していた隊長が戻ってきたが…

ジュン「隊長顔色悪いんとちゃいますか？」

そつ、健康1番である隊長が顔を悪くして帰って来たのだ。

俺等を見た隊長は

ロツサ「ああ…俺は大丈夫だ。それよりルネ・ジュンちょうどよかったお前ら今から俺について来い」

ルネ「はい。了解しましたがどこへ？」

ジュン「任務ですか？」

ロツサ「任務に近いかもしれないが大丈夫だ。ちょっと頼みたい事があるらしいんだニケール国王から」

ルネ・ジュン「「国王から！？」」

ロツサ「そう驚くな。」

ルネ「すみません…」

ジュン「驚いたもので…」

ロツサ「まーそうだろうな。そろそろ行かないといかんから行くぞお前ら」

ルネ・ジュン「「ハッ！！」」

そして俺等は隊長について行つた…

そして俺等は後悔してしまうんだ。
この兵士になったことを...

2話

俺とジュンは隊長について行ったすると他の部隊から何人か他の隊長に連れられている。

しかも俺の勘ではみんな結婚している。

まーただのぐうぜんと思いながらも俺は歩いていた。

ロッサ「ここだ。ルネ・ジュン気をしめていけよ…俺はここまでだ。」

ジュン「えっ！？はい、わかりました。このまま奥に進めばいいんですね？」

ロッサ「ああ。後この奥で行われてることは他の者には内密に頼む

…」

ルネ「内密？なんかやばいものでもあるんですか？」

ロッサ「ヤバイもんかは自分等の目で確かめてくれ。」

そう言うのと隊長は元来た道を歩いて行った。他の隊長の人たちも歩いて行った

ジュン「何が起るんやろう…なんか心配になってきたわ」

ルネ「ああ。でも行ってみなきゃ分かんないだろ…行こう。」

ジュン「そやな！案外いいことだったりしてな」

そう言いながら歩いて行ったジュンを追いかけてながら俺たちは奥へ進んでいった。

すると

ルネ「（血のにおい？）」

なぜか知らないが、奥から血なまぐさいにおいがしてきた。

ジュン「おい…なんか血のにおいしてないか？」

ジュンの言葉にそこにいた兵士達は頷いた

ルネ「もしかしたら俺等危ないんじゃないのか？」

俺の発言で空気が凍ったがさすが兵士と言うのだろうかみんな一瞬固まったがまた歩き出した。

ジュン「まーこれで最悪の感じやしもうなんでもかかってこいって感じだわな」

ルネ「そーだな。俺らだって5年兵士やってるわけだしな」

ジュン「そーやな！」

と話していると先に行っていた兵士が固まっている…

ジュン「どないしたんですか？」

ジュンが肩を叩こうとした時

??「誰…」

その声を聞いた瞬間背筋が凍った…なんて無機質な声なんだ。まるで魂がないみたい…でもロボットの声ではない。やはり人間なのだろうか…

ジュン「こっ子供…？」

ジュンの声は震えていた…

そこにいたのは4歳くらいの子供が立っていた…しかも血だらけで…その子の血ではなく、返り血なのだと気付いたのには少し間が入った。

俺は居てもたつてもいられずその子に駆け寄った

ルネ「どーしたんだ！！こんな血だらけで…何があっただんだい？」

子供「……」

子供は何も言わなかった。

すると奥から誰かがやって来た

エリーヌ「着くのが早かったじゃないか。待っていたんだ…」

ジユン「エリーヌ国王…」

ジユンの言葉には殺気が込められていた。

エリーヌ「俺は早くここから立ち去りたいんだが…お前らに説明しなければいけないからな。お前、こいつを連れてついて来い。他の奴らもだ。」

そう言つて国王は歩いて行つた。

ジユン「あの噂は本当だったんかいな…」

ルネ「そーみたいだな…」

俺とジユンそれにきつとここにいた兵士みんながきつと国王に良い印象は持たなかっただろうもし国王じゃなかったら殺していたかもしれない…そんなことは考えたくはなかった。

それに…

子供「………」

この子がとても怯えていたから…俺はその子の手を取った

ルネ「大丈夫だよ。」

としか言えなかった…

そして俺等はその子を連れて国王のもとへ歩いて行つた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4256v/>

プロトクラスト第1章

2011年10月9日12時27分発行